

# 新しい町

小川未明

青空文庫



もくら、もくらと、白い雲しろくもが、大空おおぞらに頭あたまをならべる季節きせつとなりました。遠とおくつづく道みちも、りようがわの町まちも、まぶしい日ひの光ひかりをあびています。戦争せんそうのためやけたあとにも、新しいバラックがあたでき、いつしか昔むかしのようなにぎやかさをとりかえし、この先さき発は展てんをつてんにおわせて、なんとなく、わかわかしい希望きぼうを感かんずるのであります。

道みちばたの露店ろてんは、たいてい戦災せんさい者しやか、復員ふくいんした人ひとたちの、生活せいかつをいとなむのであります。勇吉ゆうきちは、おかあさんと、毎ま日いちにちここへでて、ろうそくや、マッチや、うちわなどをならべて、あきなっていました。

その前まえを通とおる人の中ひとなかには、よごれた服ふくをきて、まきぎやはんをはき、おもそうなりユツクをしよい、いま戦地せんちから、もどつたばかりというふうな人ひともありました。そうかと思おもうと、はでな着物きものをきて、美うつくしい日ひがさをさす女おんなの人ひともありました。

きようは、勇ゆう吉きちひとりで、露店ろてんへでていました。そして、おとうさんがまだ生いきていてひよっこりかえつてくるのではないかと、空想くうそうにふけりながら、あてもなく町まちの右みぎや左ひだりをながめていました。

かれのとなりには、おじいさんが、げたの店みせをひろげていました。そのおじいさんは、なにかとせわをしてくれたり、うちけはなし話はなしをしてくれる、したしみぶかい人ひとでした。だまっはなしているとき

は、よくおじいさんは、いねむりをしていました。しかし、ねむりきつていのではないから、なんでも、よくわかっているようです。

「おじいさん、そこへへび屋<sup>や</sup>ができましたね。」と、勇吉<sup>ゆうきち</sup>は話<sup>はな</sup>しかけると、

「もと、あちらの角<sup>かど</sup>にあつたのが、やけたので、こつちへ、移<sup>うつ</sup>つてきたのだろう。」と、おじいさんは、目<sup>め</sup>をとじたままで、こたえました。

「前<sup>まえ</sup>には、いろんな生<sup>い</sup>きたへびが、びんの中<sup>なか</sup>に、入<sup>はい</sup>っていましたね。こんどは、生<sup>い</sup>きたのがいませんよ。」

「そうかい、いなくなつたか。」と、おじいさんはいつて、だま

ってしまいました。それは、ねむってしまつたのでなく、かんが考へごとくにふけたからでした。

おじいさんは、そのへび屋やが、まだ、あちらの角かどにあつてやけない前まえには、よく店みせさきに立たつて、びんにはいつている赤あかい目めをした青あおいへびや、頭あたまの大きい黒くろいへびをながめながら、それらのどくへびがすんでいるジャングルで病びょうし死しした、おいのことを思おもつたのでした。

「あの子こも、戦せんそう争そうさえなければ、死しななかつたのに。」

ふと、おじいさんは、いまもまたそう思おもつて、目めをあけると、  
勇ゆう吉きちが、

「おじいさん、南なん方ほうからは、もうみんな、復ふく員いんしてしまつた

でしようね。」と、きいたのでした。

「なんでもそんな話はなしだな。」

「やはり、うちのおとうさんは、死しんでしまったのか。」と、勇ゆう

吉きちは、つぶやきました。

「ううん。」と、おじいさんは、同どうじよう情じゆうするようについて、勇ゆう

吉きちをば見みました。

「きようは、おまえさんひとりなのか。おかあさんは、どうなさ

つた。」

「弟おとうとがかぜをひいたので、休やすんだのです。」

「それはいけないな。今こんど度の戦せんそう争そうは、どれほど人ひとを泣なかしたか。

まだかえらない人ひとにもうひとり、思おもいだす人ひとがあるよ。」と、お

じいさんはいいました。

「それは、どんな人ですか。」

「冬の寒い晩のことだった。露店の射的に、おかみさんがあか

んぼうをだいて、カンテラのそばにすわっていた。そこへかくぼうをかぶった、学生さんがやってきて、じょうずに、ポン、ポ

ンたばこをうちおとしたのだ。はじめのうちは、うまいなと思っ

て、見ていたが、しまいには、おかみさんがきのどくになって、こ

の女の主人も、たぶん戦争にいつているのだろうと思うと、

だまっていられなくなつて、『学生さん、すこしさつするもの

だよ。』といった。すると、学生さんはふりかえつて、『おじ

いさんしんぱいしなさんな、ぼくは、一つだけもらつて、あとは



おいてゆきますよ。こうしてあそぶのは、今夜こんやだけですからね。』  
 といった。わしは、おどろいて、『えつ、今夜こんやだけ。』とたずね  
 ると、『ぼくは飛行兵ひこうへいを志願しがんしたので、あす南方なんぽうへ出しゅつ発ぱつ  
 するのです。』といったが、たぶん、あの学がく生せいさんはかえつて  
 こまいと思おもつたのさ。」と、おじいさんは、まただまつてしま  
 いました。

勇吉ゆうきちは、さつきからおじいさんのだまつていた心持こころもちが、  
 わかるような気きがしました。

あちらへ、赤あかい風船球ふうせんだまを売うる屋台やたいがでました。また、金魚きんぎょ  
 売うりが、荷にをおろしてました。まわりへこどもらが、集あつまっ  
 ています。その風景ふうけいは、今いまも昔むかしと、すこしの変かわりもありません

ん。ただ、ぼくや正ちゃんがあの中なかにいないだけだと、勇吉ゆうきちは思おもったのでした。

ここへ、店みせを出だしてから、じき一年ねんになるが、毎日まいにち待まつても、おとうさんはかえらないばかりか、仲なかよしの正ちゃんまでとおらないのが、勇吉ゆうきちには、たまらなくさびしく感かんじられました。

まれに、おかあさんを知る人しひとが、通とおりかけて、

「まあ、こんな、お小ちいさいのに。」と、自分じぶんを見ていみうと、おかあさんまでが、

「いまから、くろうさせたくないのですが。」と、答こたえるのです。勇吉ゆうきちには、それがいちばん悲かなしいのでした。そこへいくと、となりなりにいる、おじいさんは、

「なに、男おとこだものな。いまから、強つよくならなければ。」と、はげましてくれる。それは、どんなに自分じぶんを、元氣げんきづけたかしのれないと、勇吉ゆうきちは思おもいました。かれは、きゆうに、おじいさんがしたわしくなつて、

「ねえ、おじいさん、ごらんなさい。赤あかい風船球ふうせんだまは、きれいでしよう。」と、話はなしかけたのでした。すると、おじいさんは、顔かおをあげて、

「おお、あれか。なるほどきれいだな。わしは、目めがかすんで、よくわからぬが、なにかほかにもついているようだな。」といいました。

「風車かざぐるまに、旗はたに、風鈴ふうりんなんかですね。」

「そうかい、子どものほしがるものばかりだ。」

つぎの日には、もう勇吉の弟の病気がなおつたので、おか

あさんは、露店へ出ていました。

とき色の雲が、町のやねを見おろす午後のごご

「さつきから、ゴロ、ゴロいつているが、夕立がくるらしい。」

と、おじいさんがいうと、

「いえ、どこか遠くで、工事をしているんです。毎日、あんな

音がきこえます。」と、勇吉は答えました。

「ひるまは、トタンがやけるので、バラックではやりきれません

。」と、勇吉のおかあさんがいきました。

こんな話をしていたとき、あちらから、せの高い男が、おどる

ような足<sup>あし</sup>どりで、なにかつづやきながら、きかかりました。通<sup>とお</sup>る  
 人<sup>ひと</sup>は、みんなその方<sup>ほう</sup>を見ていました。やはり戦<sup>せん</sup>闘<sup>とう</sup>帽<sup>ぼう</sup>にまきぎや  
 はんをして、復<sup>ふく</sup>員<sup>くいん</sup>兵<sup>へい</sup>らしく、一つ一つ露<sup>ろ</sup>店<sup>てん</sup>をのぞきながら、こ  
 ちらへ近<sup>ちか</sup>づき、おじいさんの店<sup>みせ</sup>の前<sup>まえ</sup>までくると、

「ここは、げただな。げたばかりか。こんなもの食<sup>た</sup>べられない。」  
 といいました。

その男<sup>おとこ</sup>の顔<sup>かお</sup>は、日<sup>ひ</sup>にやけて黒<sup>くろ</sup>く、目<sup>め</sup>が光<sup>ひか</sup>つて、ひげは、やみあ  
 がりのようにのびていました。こんどは、勇<sup>ゆう</sup>吉<sup>きち</sup>の店<sup>みせ</sup>の前<sup>まえ</sup>に足<sup>あし</sup>を  
 とめて、

「ここは、ろうそく、マッチ、かやりせんこう、色<sup>いろ</sup>紙<sup>がみ</sup>、みんな  
 たべられないものばかりだ。」と、ひとりごとをしてから、トテ、

トテ、トー、トツテ、トツテ、ターと、口くちでらつぽのまねをしました。さつきから、そのようすを見ていたおじいさんが、

「にいさんは、どちらから、おかえりですか。」と、ききました。

「おれかい。ニューギニアだ。おれはへびもたべたし、とかげも、あおむし青虫も、なんでもたべた。まだ、ろうそく、マツチは、たべなかつたよ。」

こうまじめにいうので、だれもおかしいと笑わらうものはありませんでした。

トテ、トテ、トー、トツテ、トツテ、ター、男おとこはらつぽの音おとをくりかえしながら、あちらへ去さりました。おじいさんは、その後うしろろすがたを見みおくつて、ためいきをつきました。

「おきのどくに、気がへんなんですね。」と、勇吉ゆうきちのおかあさんがいうと、

「戦争せんそうが、わるいんだ。」と、おじいさんは、こたえて、こちらへむきなおり、

「勇ちゃんゆうは、はやく大きおおくなつて、かわいそうな人ひとたちの、力ちからになつておやり。」といました。

勇吉ゆうきちは、目めにいっぱいなみだをためて、だまつてうなずきました。





## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「赤い雲のかなた」小峰書店

1949（昭和24）年1月

初出：「幼年クラブ」

1947（昭和22）年8月

※表題は底本では、「新《あたら》しい町《まち》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年8月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 新しい町

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>